

廃校を利用して、 南房総で始めるデュアルライフ

—住む・泊まる・食べる・働く・学ぶの

多目的施設—



合同会社ウッド社員・多田 佳世子

015年にスタートしました。

◆◆◆ 求め、廃校利用

千葉県最南端の白浜町。花と海女で一時代を築いたこの町も過疎と少子化が進み、町内にあった2つの小学校のうち1つ、長尾小学校が2011年に閉校されました。近隣住民から早期の利活用が望まれる中、既に白浜町内でシェアハウスなどを運営していた合同会社ウッドが廃校利用に手を挙げます。

長尾小学校を所有する南房総市へのプレゼンテーションにあたっては、同じ頃に「無印良品の小屋」の事業計画を進めていた株式会社良品計画と協力関係を築くことができ、校庭部分に「無印良品の小屋」を建て、旧校舎を商用スペースにするというリノベーションとコミュニティづくりが2

◆◆◆ 廃校の使い方

商用スペースの機能として、最初に着手したのが宿泊棟です。吹き抜けの天井や大きなガラス窓といった学校時代の特徴はそのままだに、エレガントな無垢材の壁やヘリンボーンの床材、古材を使ったハリウッドミラーなど、こだわりの調度品を利かせました。すると、このコンセプトが空間がSNSに投稿され、若い層の反響を呼びました。また、自然と触れ合える白浜の特性上、ファミリー層の利用のニーズも取り込み、共同キッチンや洗濯機を備え付けることで、家族旅行のリピートもとれるようになりました。

続いて、教室を改修して作ったシェアオフィス

られるようになると、都心から2時間で来られるというアクセスの良が見直され、四季折々の豊かな自然や食がクローズアップされると、徐々に興味を持つ人が増えていきました。現在、小屋は14棟が竣工、利用者たちの間にも少しずつ交流が生まれ、その延長にシラハマ校舎が思い描いたコミュニティが見えてきました。

最も苦戦を強いられたのがレストラン部門です。当初から事業計画にあったため、プレイルームとして使われていた一番大きな部屋をダイニンググにあてました。厨房も予算を投じて大改装。最新のスチーム・コンベクション・オーブンも入れて飲食店の入居を待ちましたが、ここでお店をやるうという人は出てきません。最終的には合同会社ウッドの社員で兼務する方向へ発想転換しました。厨房器具メーカーのキッチンスタジオへ勉強



シラハマ校舎。向かって右が宿泊棟、左がシェアオフィス



ツインのハリウッドミラーを設えたゲストルーム



シェアオフィスに入居したコワーキングスペース

に通い、「シェフは知らない、料理は科学」と背中を押されてホームメイド・レストランの道へ。地元の新鮮な食材を使うこと、温度管理を徹底することで、FARM TO TABLE/地産地消のレストラン「バルデルマル」が完成しました。シラハマ校舎に「学ぶ」の機能をつけたのは外部の講師陣です。最初はヨガの講師を招いてのワークショップ、次に菜園教育「エディブルシラハマ校舎プロジェクト」がスタートしました。長らく放置していた旧小学校時代の畑を復活させ、夏はピーマンやナス、冬はホウレンソウなどの薬物を育てています。また、シェアオフィスに入居している千葉工業大学も地域の子供たちのためにオープンラボを始めました。ハンドスピナーや電子回路など、理系の大学生らしいアプローチでモノづくりを教えています。

◆◆◆ 人的交流の成果と今後の課題

合同会社ウッドは夫婦ふたりの小さな会社です。シェアオフィスの賃料やレストランの売り上げなどの収益はあるものの、公的補助を受けずに施設を運営するにあたっては様々な局面にぶつかります。しかし、年々集客は増え、多くの方知って頂けるようになりました。レストランやゲストルームといった単発的な利用のほかに、「無印良品の小屋」を購入して都心と白浜との2拠点居住を実施する人や、シェアオフィスを借りて事業活動を行う法人もあります。

そして、シラハマ校舎内の利用客だけでなく、地域住民との交流も含めたコミュニティデザインで評価され、翌年には経済産業省により地域未来牽引企業にも選ばれました。

シラハマ校舎の今後の展開ですが、やはり学校は町のシンボルです。卒業生をはじめ地元の方が利用しやすい施設づくりをし、かつ、他県や海外から訪れる方たちにとって、より魅力的な場所を目指す必要があります。これについてはシラハマ校舎単体ではなく、環境の美化や、近隣で起業する方たちの支援も行い、地域一丸となって取り組むたい、そして同じような遊休施設の利活用にも積極的に関わっていきたく考えています。



校庭に建つ「無印良品の小屋」